



左から 次女・亜純さん(大学1年)、長女・科野さん(大学4年)、母・綾子さん(82)、中嶋さん(54)、洋子夫人(53)、ホムステイ中のロイ・エリザベスさん(22)、長男・啓雄さん(大学院1年)、次男・聖雄さん(大学2年) 東京都板橋区の自宅で

(今夜の献立) カキフライ、カボチャ・ナスのからあげ、きざみキャベツ、肉ジャガ、ダイコンとカニのスープ、ぬか漬、きのこめし。

### 「きのこめし」の香りに 過ぎゆく秋を堪能

わが国の家族人口はますます減少しつつあるというのに、私が一人っ子だったこともあってか、わが家は男女四人の子供と妻として母の七人構成。加えてここ数年は、ホームステイの外国人の子供や大人が常時参入するので、ますます大家族に。現在はイェール大学を卒業したで「日本見習い中」のエリザベスを含めて八人家族。

こうなると全員一緒の食事は週に一回程になるが、それは同時に各自の行動報告の場としてのミーティングの時間にもなる。だから、妻は、比較的長い夕食時間をできるだけ楽しくしよう、おかずの数を多くして、誰かが大好物の皿がいつもあるように心がけているらしい。もっとも、私の妻は、これだけの家族を抱えているながらフルタイムの職業(公立中学の理科教師で三年生の担任)をもち、子供たちはみな自分の時間に忙しくて、わが家に大勢が集まるパーティーのときぐらいしか手伝いを始どしない。つい小生の小言も多くなるけれど、帰宅後の短時間のうちに手際よく夕食をつくる妻のノウハウには感心させられる。幸い、この十一月四日で満八十二歳になった母が健在なので、ご飯だけはいつも良く蒸れている。

今夜は、小生の好物カキフライが一皿加わっている。たまたま、郷里の松本の山に分け入って採ったという「駄ぎのこ」を幼友達Mさんが送ってくれたので、妻が時間をかけて「きのこ飯」を炊きあげた。その香りに過ぎゆく秋を堪能した。

#### ひとこと

家族それぞれのお気に入りのおかずをなにか一品ずつ作ろうとするせいか、いつも品数が多くなつて大変です。(洋子夫人)

撮影 篠塚則明

現代中国の政治社会を研究、文化革命期を通観した著作「北京列烈」で81年度サントリー学芸賞を受ける。近著に「歴史が求めているものは何か」日本人と中国人「こが大違い」がある